校長室から ひがしなら通心

（R元年度）
茨木市立東奈良小学校　川上　隆　No. 85
令和2年3月23日（月）発行

ある新聞
記事より
毎日小学生新聞3／19・21

前号84号の続きの記事です。見出しを考えることは、国語力の向上に役立ちます。

見出しをニコニコ

つけてみよう

学校新聞のコツ！

大阪市少年野球大会が18日、大阪市北区の毎日球場で開かれ、毎日小学校の野球部が鳴神小学校を3―2で降し、初優勝した。今年は50回の記念大会で、市内から50チームが参加。決勝戦では、強豪の鳴神小を接戦の末に振り切り、悲願を果たした。

★基本形

新聞は2本見出しが基本

主見出しは8字前後

わき見出しは11字まで！

＝1面からつづく

新聞の読み方がわかったみなさん。次は、「学校新聞」の見出しづくりに挑戦してみましょう。自分の学校の野球チームが市の大会で初優勝しました。記事を読んで、見出しをつけてみてください。

「見出しをつけるには、まず原稿を読んで、誤りをチェックしながら、『ここは見出しになりそうだな』と思うところをメモします。そして、メモした言葉をつなぎあわせてみましょう」

そう話すのは、新聞の紙面作りのプロでもある鳴神大平記者です。

今回、見出しの基本形は、右側の大きな「主見出し」を8文字前後、左側の小さな「わき見出し」を11文字以内とします。コツは、主見出しに一番重要な内容（キーワード）を盛り込み、必要な要素をわき見出しでおぎなうこと。いかに「わかりやすく」「短く」表現するかがカギです。「一目でわかるかどうかがポイント」といいます。

記事のキーワードをメモしていくと、①大阪市少年野球大会②毎日小③初優勝④強豪・鳴神小に3―2⑤50回記念大会⑥接戦⑦悲願達成――となります。「この言葉をつなぎあわせると、見出しが浮かんできませんか」と鳴神記者は問いかけます。

さて、見出しのサンプルを見てみましょう。大阪市内で発行する一般の新聞なら、Aのようになります。「毎日小学校が初優勝した」という一番大事なことが大きな見出しになっています。「でも、あなたが作るのは学校新聞。つまり読者が毎日小学校の児童や家族、地元の人たちに限られます。だから見出しに『毎日小』という言葉がなくても、みんな毎日小のことだとわかってくれますよね」

なので、学校新聞では、Bのように「野球部が初優勝」とつけます。これが基本です。

「そして、この見出しをニコニコ顔にしましょう」と鳴神記者は強調します。それがCの見出しです。「やったぞ！」に喜びが込められています。

つまり、キーワードをおさえて、まず基本の見出しを考え、それをキラキラ輝く言葉に言い換える――というのが見出しのつけ方の極意というわけです。

「こうやって編集者は日々、頭をひねって見出しをつけています。見出しを見て興味がわいたら、記事に目を通し、世の中の出来事に関心を持ってくれると、うれしいです」と、鳴神記者は話しています。

★見出しA

市内で発行する一般の新聞

毎日小が初優勝

市少年野球　鳴神小を降す

★見出しB

学校新聞の見出しの基本形

野球部が初優勝

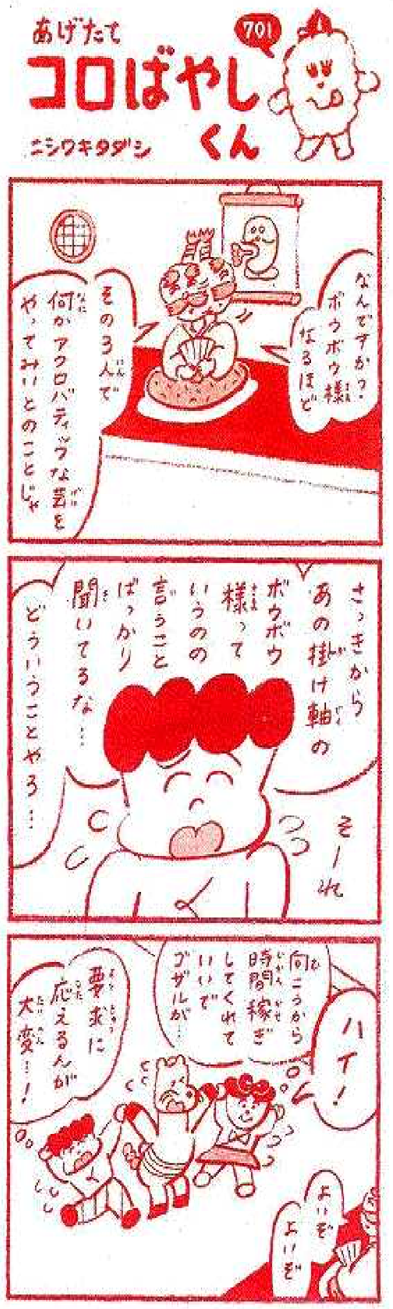
市大会　強豪鳴神小を降す

★見出しC

Bをニコニコさせた見出し

やったぞ！　野球部

市大会で悲願の初優勝


あげたて
コロばやしくん
701
ニシワキタダシ
なんですか？ボウボウ様！なるほど
その3人で何かアクロバティックな芸をやってみいとのことじゃ
さっきからあの掛け軸のボウボウ様っていうのの言うことばっかり聞いてるな…
どういうことやろ…
そーれ
ハイ！
向こうから時間稼ぎしてくれていいでゴザルが…
要求に応えるんが大変…！
よいぞよいぞ

キャサリン・ジョンソンさん（黒人）の生涯を描いた映画「ドリーム」（邦題）。私も数年前、映画館で観ました。

的川博士の銀河教室 590

的川泰宣さん　長らく日本の宇宙開発の最前線で活躍してきた「宇宙博士」。現在は宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）の名誉教授。1942年生まれ。

キャサリン・ジョンソンさん死去

アポロに貢献した数学者

2月の末に、とても悲しいニュースが入ってきました。米国の宇宙開発に多大な貢献をした数学者・計算手であり、映画「Hidden Figures」（邦題：ドリーム、日本公開は2017年）のモデルにもなったキャサリン・ジョンソンさんが、さる2月24日に死去されたそうです。101歳でした。

「マーキュリー計画」が緒に就いた1960年代の初め、すでに電子計算機が登場してはいたのですが、まだ日が浅く、世の中の人たちがまだその計算機を信用していなかった頃です。ほとんどの計算は「コンピューター」と呼ばれる女性たちの手計算に頼っていました。当時「コンピューター」という言葉は、機械ではなく、「計算をする人」を指していたのです。そんな時代、アポロ計画を先導するＳＴＧ（スペース・タスク・グループ）というチームが、米国バージニア州ハンプトンのＮＡＳＡラングレー研究センターで結成されたとき、そこには、その「コンピューター」の女性がたくさん働いていました。

ロケットの打ち上げに必要不可欠な計算を行う黒人女性グループの中に、天才キャサリン・ジョンソンさんがいました。彼女は、10歳で高校に入学し、18歳で数学とフランス語の学位をとった後、人種差別を撤廃したウェストバージニア大学の大学院に、22歳で進学した初めてのアフリカ系米国人でした。

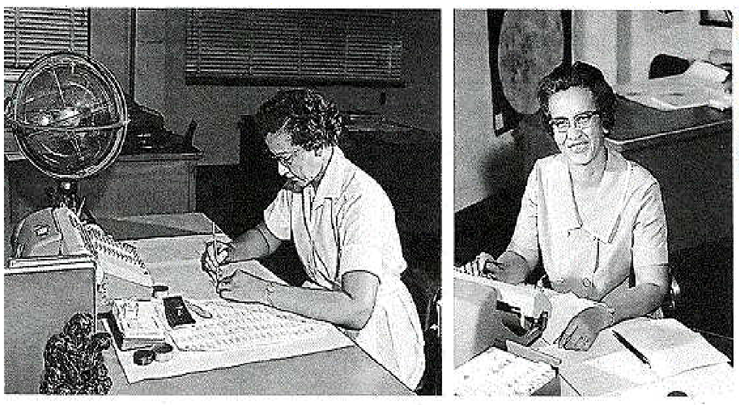


写真１　若き日のキャサリン・ジョンソンさん＝ＮＡＳＡ提供

キャサリンさんのあまりに優秀な「手」計算能力に、ＳＴＧチームは、メンバーに彼女を加えて頼りにしました（写真１）。1962年のこと。米国で最初の軌道飛行をすることになるジョン・グレン宇宙飛行士の飛び立つ日が迫っていました。

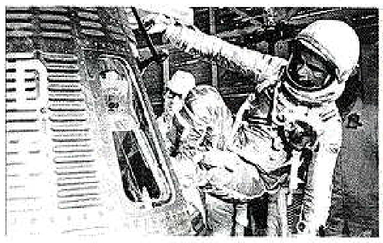


写真２　ジョン・グレン宇宙飛行士＝ＮＡＳＡ提供

すでにＩＢＭのコンピューターが堂々たる「電子計算機」として使われていたのですが、グレン飛行士は、１秒間に２万4000回もの演算をするマシンを信頼できません。そのコンピューターの計算結果をキャサリンに、かつての手計算で検算してほしいと依頼しました。彼女の手計算で正しいことが証明されなければ、飛ぶのは嫌だというのです。

当時キャサリンは、すでにＩＢＭコンピューターを使っており、数値計算の新しい計算方式を提案するほどだったのですが、苦笑いをしながらも、グレンのためにせっせと誠実に「手」計算したところ、計算結果は、ＩＢＭとぴったり一致したのでした。グレンは安心して、マーキュリー宇宙船に乗り込みました（写真２）。

2103
Katherine G. Johnson Computational Research Facility
1 Lindbergh Way

写真３　開設されたセンターの前に座るキャサリンさん＝ＮＡＳＡ提供

キャサリン・ジョンソンは1986年に引退するまで、宇宙開発のために一生懸命に働きました。2017年９月、ラングレー研究センターに開設されたコンピューターセンターは、彼女の功績をたたえ、「キャサリン・Ｇ・ジョンソン・コンピューター研究センター」と命名されました（写真３）。本当にお疲れさま。謹んで哀悼の意を表します。

新型コロナ提言　患者いなければ学校再開

新型コロナウイルスの感染の広がりを防ぐため、政府の専門家会議が19日、新しい提言をまとめました。これからは、全国一律ではなく、それぞれの地域の感染状況に応じてバランスの取れた対策を求めました。感染が確認されていない地域では、学校活動などを再開することを示しました。

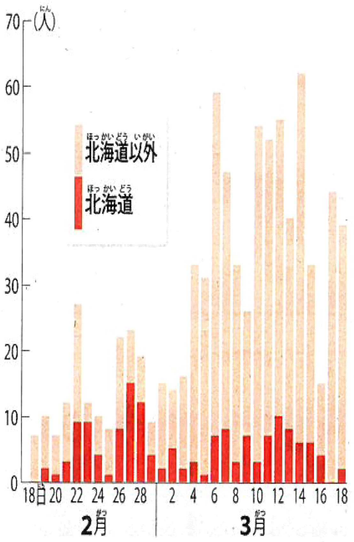
感染状況に応じた対策では、感染が広がっている地域は、大がかりなイベントをひかえることなどを示しました。感染がある程度収まっている地域は、リスク（危険なこと）の低い活動から徐々に制限を解除することを考えるよう求めました。

休校解除、来週に目安

全国の小中高校などの臨時休校について自治体に解除を判断してもらうため、萩生田光一・文部科学大臣は「来週中に目安を示したい」と述べました。

科学

この1か月の国内の新型コロナウイルス感染者数



※自治体から厚生労働省への報告日で集計